Wakayama University Symposium Series Vol.3

和歌山大学国際シンポジウム 第3回

アジアにおける日本語教育ー日本語教育と日本学ー

報告論集

2024年2月15日(木)13:00-16:50

ハイブリッド開催

主催：和歌山大学 国際イニシアティブ基幹

日本学教育研究センター

Wakayama University
Center for Japanology Studies

CJS　主催

Wakayama University Symposium Series Vol.3

和歌山大学国際シンポジウム 第３回

「アジアにおける日本語教育―日本語教育と日本学―」

報告論集 目次

「アジアにおける日本語教育―日本語教育と日本学―」の開催に寄せて..... 2

第 3 回 国際シンポジウム　開催趣旨..... 3

プログラム..... 5

［基調講演］..... 6

事例報告..... 9

［本学　事例報告］..... 10
［協定大学　事例報告 1］韓国・東国大学..... 12
［協定大学　事例報告 2］ベトナム・フェニカ大学..... 14
［協定大学　事例発表 3］インドネシア・ビヌス大学..... 16
［協定大学　事例報告 4］中国・東北財経大学..... 18

レスポンデントによるコメントと質問、全体討議..... 20

イベント実施報告..... 25

和歌山大学国際シンポジウム　第 3 回準備委員会..... 26

「アジアにおける日本語教育―日本語教育と日本学―」の開催に寄せて

I am delighted that an international symposium is being held at Wakayama University. I sincerely express my gratitude to all of you who have participated.

In our international education at Wakayama University, we aim to human resources development who learn about Japanese culture, understand diverse cultures, and contribute to solving social issues. I hope that this symposium will further contribute to the development of Japanese language education in Asia in the future.

さて、グローバル化時代を迎えて、世界中の人たちが、国境を越えて交流しています。英語はもちろんですが、日本語もまた、世界中で、多くの人たちが学んでいます。日本語学部・学科をもつ海外の大学も少なくありません。

とはいっても、英語やスペイン語などとは違って、日本語は多くの国で日常的に使用される言語ではありません。では、海外で、日本語を学ぶ人たち、大学で日本語を専攻する学生たちは、どういう理由で、日本語を学ぼうとするのでしょうか。日本語は、長い歴史の中で、日本の文化を背景として育まれてきたことばです。日本語と日本文化は切っても切り離せない関係にあります。そして、いま、海外の日本語学習者の多くもまた、日本のサブカルチャーや伝統文化に関心をもち、日本文化をより深く知るために、日本語を学ぼうとしています。

英語は、あらゆる場面でグローバルなコミュニケーションの、不可欠な道具となっています。日本語もまた、ことばである限り、コミュニケーションの道具であることはいうまでもありませんが、しかし日本語への関心は、日本学、日本文化への関心と、切り離せない関係にあります。和歌山大学が、日本語教育を、日本の文化や社会や歴史を学ぶ「和歌山大学　日本学教育研究センター」に位置付けているのも、そのためです。

しかし、本学のセンターも、まだスタートしたばかりです。本日のシンポジウムで、基調講演の先生、協定大学で日本語教育を担当されている先生方、また本学の日本学センターの教員が、それぞれの経験を生かしながら、日本語教育と日本学の関係について、議論を深められることを期待しています。

このシンポジウムが、会場で、またオンラインで参加されている全ての方々にとって、意義あるものとなり、国際的な交流の発展に寄与することを願っています。

和歌山大学長
本山　貢

第３回 国際シンポジウム　開催趣旨

今回のシンポジウムは、アジアにおける日本語教育の第３弾として「アジアにおける日本語教育―日本語教育と日本学―」というテーマとしました。

ご承知のように、我が国の留学生の本格的な受け入れは 1980 年代に始まりましたが、その当初から、留学生の必修科目として、「日本語」科目と並んで、日本語の背景となっている日本の文化や社会のことを学ぶ「日本事情」という科目が組み込まれました。

今世紀に入ると、日本経済の停滞に伴って、海外の若者の日本への関心が経済から文化へと向かい、日本語の学習、日本への留学の理由のトップに、日本のサブカルチャーや伝統文化への関心が挙げられるようになります。それに応えて、各大学では、日本文化を体験的に学習できる「日本文化体験」講座などに力を入れるようになりました。また、地域の文化行事や祭りに参加するなど、体験型、参加型の授業が取り入れられました。

更に近年、各大学に、「国際日本学センター」や「国際日本学部」など、「日本学」という名称を使った新たな取り組みも登場するようになっています。これらに共通しているのは、日本の社会や文化を学ぶというだけでなく、日本の社会、ひいては現代世界が抱える問題をグローバルな視点で主体的にとらえなおそうという姿勢だと思います。

私たちは、新型コロナウイルスの感染拡大を経験し、これまで当たり前とされていた常識が変化し、将来の見通しが難しい状況、ある問題に対する絶対的な答えがない状況で生きています。

こういった背景から、座学とフィールドワークを連携させ、ローカルな問題を国際的な視点から捉えることの重要性、また、自らの価値観、文化を相対化させながら、多様な価値観、生き方を認め合うことの必要性も注目されています。日本人学生と留学生が共に学び、討議する中から、改めて日本の文化や社会のあり方を問い返し、日本だけでなく、アジア、さらに世界の、これからの共生的な文化や社会のあり方を考えようということです。「日本学」という名前が適切かどうか分かりませんが、基本的な姿勢としては、そういうことがいえるのではないかと思います。

そういった問題意識から、今回は、日本語教育をとりまく変化の激しい時代を踏まえて、「日本語教育と日本学」をテーマにしたシンポジウムを企画いたしました。

まず、基調講演で、京都教育大学の浜田先生に「参加型日本学のすすめ―京都大学「体験しよう！京都」プログラムを例として―」というテーマでお話しいただき、次いで、アジア各国の協定大学の先生方から事例発表をしていただきます。

基調講演、各国の事例発表、質疑応答を通して、皆様の相互理解と共通認識が深まることを願っております。

和歌山大学　日本学教育研究センター
センター長・日本語教育教授
長友　文子

Wakayama University Center for Japanology Studies

Wakayama University Symposium Series Vol.3

和歌山大学国際シンポジウム

アジアにおける

――日本語教育と日本学――

日本語教育

和歌山大学日本学教育研究センターでは、2023年4月に「わかやま日本学副専攻プログラム」がスタートしました。
このプログラムでは日本文化を学び、異文化を理解し、社会的な課題解決に寄与する人材の育成を目標としています。そのため、このプログラムでは座学(日本人学生と留学生の共修)とフィールドワークを関連させながら、課題解決に向けた学習を実施しています。本シンポジウムでは、日本語教育と日本学に関する基調講演「参加型日本学のすすめ～京都教育大学『体験しよう!京都』プログラムを例として」の後、本学での日本学の取り組みについて報告します。そして、中国、ベトナム、インドネシア、韓国の大学から事例紹介をしていただきます。

オンライン Zoom webinar 定員500名

和歌山大学 北1号館1階A101 定員100名

参加無料

2024年 2月15日(木) 13:00～16:50(日本時間)

参加方法はオンライン(Zoom)、または、和歌山大学北1号館1階A101特設会場にて。

基調講演

「参加型日本学のすすめ～
京都教育大学『体験しよう!京都』プログラムを例として」

京都教育大学 教授　浜田 麻里

大阪大学助手、国際交流基金日本語国際センター日本語教育専門員、大阪大学留学生センター助教授を経て、現職。現在は国際交流担当副学長として、留学生交流に携わっている。その他、文化審議会国語分科会長、文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー等を務めている。

総括

和歌山大学 日本学教育研究センター センター長
長友 文子

和歌山大学教育学部に赴任後、2006年に国際教育研究センター長、2021年から国際連携部門長を務める。留学生の日本語、日本文化、国際理解教育や、日本人学生の日本語教育学を担当。また、和歌山県国際交流協会理事を務め地域の在住外国人・外国人児童生徒の支援に関わっている。

事例発表

dongguk UNIVERSITY
鄭 聖希
(韓国・東国大学 日本学研究所 専門研究員)

Le Thi Ngoc
(ベトナム・フェニカ大学 日本語基礎科学 副学科長)

Utari Novella
(インドネシア・ビネス大学 日本語学科長)

胡 偉
(中国・東北財経大学 日本語学科長)

安本 博司
(和歌山大学 日本学教育研究センター 副センター長)

事例発表 司会　日本学教育研究センター 特任助教　嶋本 圭子

右記QRコードまたは和歌山大学日本学教育研究センター(CJS)HPから登録フォームにて事前にお申し込みください。

Wakayama University Center for Japanology Studies

【主催・お問い合わせ】国立大学法人和歌山大学 国際イニシアティブ基幹 日本学教育研究センター(CJS) TEL.073-457-7524 ／ Mail kokusai@ml.wakayama-u.ac.jp

和歌山大学

プログラム

13:00-13:10

■ 開会宣言

［総合司会］藤山　圭子（フリーアナウンサー）

■ 開会挨拶

本山　貢　和歌山大学長

■ 趣旨説明

長友　文子（和歌山大学日本学教育研究センター　センター長）

13:10-13:50

■ 基調講演「参加型日本学のすすめ～京都教育大学『体験しよう！京都』プログラムを例として」

浜田　麻里　京都教育大学 教授

14:00-14:20

■ 質疑応答

14:20-16:00

■ 事例報告

［司会］嶋本　圭子（和歌山大学日本学教育研究センター　特任助教）

［本学事例報告］
安本　博司（和歌山大学日本学教育研究センター　副センター長）

［協定大学事例報告］
事例 1：鄭　聖希（東国大学／韓国）
事例 2：レー　ティ　ゴック（フェニカ大学／ベトナム）
事例 3：ウタリ　ノベラ（ビヌス大学／インドネシア）
事例 4：胡　偉（東北財経大学／中国）

16:10-16:40

■ レスポンデントによるコメントと質問、全体討議

［進行役］
長友 文子

16:40-16:50

■ まとめ

長友 文子

■ 閉会挨拶

藤永　博　和歌山大学副学長

［基調講演］

参加型日本学のすすめ
～京都教育大学「体験しよう！京都」プログラムを例として～

浜田麻里（京都教育大学）

インターネットの発達とともに、グローバリゼーションは加速した。文化の違いは薄れ、むしろ個人の多様性が際立つようになっている。さらに、自動翻訳を行う AI の登場により、外国語を学ぶことの意義も問い直されている。この時代に日本語や日本学を学び教えるとはどういうことなのだろうか。

この問いに答える手がかりとして、まず、〇〇文化を語ることの危険性について述べた。批判的意識を持ち、文化は多様で流動的なものであると捉えることが重要である。

また、学習研究に関する国際的潮流にも言及した。OECD の Education 2030 プロジェクトで提案された「変革を起こすコンピテンシー」には「新しい価値を創造する力」「対立やジレンマに対処する力」「責任ある行動をとる力」が含まれる。日本語教育や日本学教育においても、このような力を如何に養うかの視点が求められる。また、学習を知識等の「獲得」ではなくコミュニティへの「参加」のメタファーで理解しようとする見方が広がっている。日本語学習は、単に日本語が話せるようになることではなく、日本語を使う人々のコミュニティへの参加と捉えることができる。

京都教育大学では 2009 年から日本語・日本文化研修プログラム「体験しよう！京都」を実施している。プログラムの修了要件の一つに、地域で行われているボランティア活動や大学のサークルに参加するなど、何らかのコミュニティでの交流活動を行う「コミュニティ・ラーニング」がある。多様な人々との交流により多様な日本を知ること、日本社会にゲストとしてではなく、メンバーの一員として参加することを目的としている。

初年度に参加した学生のレポートを分析したところ、課題解決能力としての日本語能力の伸長、日本についてのステレオタイプからの脱却、自身の文化の相対化に加え、自身も日本社会の一員であるという感覚や自己肯定感が得られたことがわかった。これらは、コミュニティの一員としての参加の経験から得られたものであり、「変革を起こすコンピテンシー」にもつながっていく可能性があることが示唆された。

この知見を踏まえ、いま求められる「日本学」は「参加型日本学」であると提言した。参加型日本学とは、変わりつつある世界の中で、何らかの形で「日本」に関わる多様な人々とのコミュニティの構築の経験である。日本学のゴールは、固定的な日本のイメージを描くことではなく、「わたし」にとっての「日本」を見つけることであること、「異文化」の差異ではなく、異質な人々が出会ったときに何が起こるかという「間文化」への着目が求められること、そして、コミュニティ構築が、日本人も日本人でない人もみな新たなアイデンティティを獲得していくプロセスとなることを述べた。

基調講演　Q&A：浜田先生の回答

【Q1】京都教育大は、和歌山大学のような地方の大学と違って、京都に立脚しているという点から、日本語教育や日本文化を学ぶ上での特色についてどう思われるか、そしてもう一つ、大学ごとの個性を生かした日本語教育や文化教育を考える上でどういうところにフォーカスしていけばいいか、お考えをお伺いしてもよろしいでしょうか。

回答： 日本といえば、京都、伝統文化というイメージがありますが、日本の文化はそれだけではない、むしろ、若い人は、伝統文化より任天堂があるところであったり、京都の駅ビルの建築であったり、日本の多様な面に興味を持っています。地方によって、それぞれすばらしい一面がありますし、そういうものが全部合わさって日本だと思うんです。京都に来ても、伝統文化と違うものをあえてみてほしい。伝統文化も商業化された側面ではなく、日常の生活の中にはどのように位置づいているのかとか、多様な面でみてほしいというのが、「体験しよう！京都プログラム」の根本にあります。ですから、むしろ、和歌山の環境が非常にすばらしいなと思っていて、京都に見られる文化とまったく違うけれども日本人の心の大事な部分に関わるいろんなものがあります。

それぞれの大学で、それぞれの地域に根差した日本学プログラムができていって、そういったものにいろんな人が参加して、またそれを国に持ち帰ってくれる、それが私たちの目指すべきところではないかと思っています。

【Q2】京都教育大では、教員を目指す日本人学生が留学生と共に学ぶという点で、日本人学生にとってどのように参加型日本学が発展して生かされているのかについてお聞きしたいです。

回答：「体験しよう京都プログラム」のもう一つの側面として、本学は教員養成の大学ですので、根本的には留学生のためだけにやっているのではない、本学の教員を目指す学生が留学生と交流する機会をもってほしいということがあります。

授業内での日本人学生と留学生の交流はあまりないのですが、サークルに入ると、コミュニティの一員となるので、サークルに入った人たちが、留学生と深い交流しているという話を聞いています。留学生の友達がいるという体験をして学校の現場に出ていく、そういうふうなことを教員になる人はやってほしいと思っています。もう一つは大学のスタッフも、普通の授業に普通に留学生が入ってきてくれることで刺激を受けたりインスパイアされたりしたことあるようなので、このようなことを続けていくことで、日本社会が開かれたものになっていくことに貢献できると考えています。

【Q3】ステレオタイプな考えを取り除き、個人個人の考え方を尊重すると海外でも国内でも一緒という事になりませんか。国際交流の意義はどこにあるのでしょうか。

回答：広い意味では、国内でも海外でもそういう交流をしてほしいと思っています。

異文化の中の自分に気づく、ステレオタイプに気づくということが波及していくと、国、文化に関わりなくいろんなステレオタイプを打破していくことにつながっていくのではないか、むしろそのために国際交流の意義があると思っています。

【Q4】海外の日本語を教えている大学、センターなどで、京都教育大学のようなプログラムを行うには、日本人のコミュニティなどがないので、難しいと思うのですが。

回答： 今、オンラインでの交流も広がっていて、オンライン上でもいろんなメディアの中でいろんな国の人がコミュニケーションしているのではないでしょうか。例えば一つの動画にいろんな言語のコメントがついて、それを翻訳したりしている、それは一つの交流の在り方ではないかと思っています。もちろん対面での交流が一番いいですが、できない場合は ICT を使ってどんな交流ができるかを日本語の先生は考えていかなければならないのではないかと思います。

【Q5】ステレオタイプを除くための教室内での教育実践、それは海外では難しいと思いますが、先生が実践されてきたものなどがあればご紹介していただけませんか。

インタビュープロジェクトのようなもの、それは海外であったとしても、例えばベトナムのハノイに住んでいる日本人にインタビューするようなことをすると、ステレオタイプの日本人とは違う日本人がいて、普通の教室の中でもステレオタイプとは違う日本の姿に触れることは十分できるのではないかなと思います。本学でも、短期プログラムで来た留学生に対しては授業に入ってもらって、必ずそういう機会を作るようにしています。

事例報告

日時：2024 年 2 月 15 日（土）14:20-16:00

［本学］

事例報告：わかやま日本学プログラム

安本　博司　　Hiroshi　YASUMOTO
和歌山大学　　Wakayama University

［協定大学］

事例報告Ⅰ：東国大学日本学研究所の歴史と現在

鄭聖希　　Chung　Sunghee
東国大学　日本学研究所　　Dongguk University Center for Japanese Studies, Korea

---

事例報告２：ベトナムにおける日本語教育事情―フェニカ大学の場合―

レー　ティ　ゴック　　Le　Thi　Ngoc
フェニカ大学　　Phenikaa University, Vietnam

事例報告３：　ビナヌサンタラ大学の事例報告

ウタリ　ノベラ　　Utari　Novella
ビナ ヌサンタラ（ビヌス）大学　　Bina Nusantara (BINUS) University, Indonesia

---

事例報告４：　「日本語を学ぶ」から「日本語で学ぶ」への転換
―異文化コミュニケーションを重視した教育実践を例として―

胡　偉　　HU　Wei
東北財経大学　　Dongbei University of Finance and Economies, Chima

［本学　事例報告］

わかやま日本学プログラム

安本　博司（和歌山大学　日本学教育研究センター）

1. 発表の背景・目的

昨今、国際日本学を筆頭に、「日本学」関連の学部・学科が増加している。和歌山大学もまた、令和５年度より、正規学生を対象とする「わかやま日本学副専攻プログラム」、非正規学生を対象とする「わかやま日本学プログラム」を実施している。しかしながら、「日本学」への理解という点で、「日本学」とは何か、といった共通認識は未だ確立されているとは言えない。本発表では、他大学の日本学の目標などから、現在、日本学が求められていることを把握、共有し、「日本学」への理解を深める。また、本学（和歌山大学）の「わかやま日本学プログラム」の概要、実践報告を通して、このプログラムへの理解を深めることを目的とした。

2. 発表の概要

本発表では、他大学の「日本学」の概要、学修目標などを示し、現在の日本研究において、「多様な視点/方法」「学際的」「国際的視野」「課題解決」などが重視されていることを示した。日本理解においては、「多様な視点/方法」で、「学際的」に、「国際的視野」に立つことが求められており、さらにグローバル的な課題を解決する指向性のもと、日本学が展開されていることを述べた。「わかやま日本学プログラム」もまた、同じ目標を共有していることを述べた。

次に、「日本学概論」「日本学演習」の実践報告をおこなった。日本学概論の実践報告では、授業概要や狙いについて述べた後、シラバス、各回の内容、目標などについて述べた。「日本学演習」においても概要や狙いを述べた。以下が両科目の概要、到達目標である。

（1）日本学概論（必修）概要

和歌山を含む地域を日本及び国際的な視野に関連付けて、多様な視点から日本社会・日本文化を取り上げ、日本学の基礎を学ぶ。また日本学を通して、共生社会に必要な視点、態度を養う。到達目標は、①多様な視点を通して、日本を自明視せず、日本文化・日本社会を深く理解できるようになる。②ローカルな問題を国際的な視野から捉えることができるようになる。③社会化の過程を見直すことによって、偏見、ステレオタイプに気づき、自らの価値観、文化を相対化させながら、多様な価値観、生き方を認め合うことができるようになる、である。

（2）日本学演習（選択必修）概要

和歌山及び周辺地域でのフィールドワークを通して、歴史や文化、ポップカルチャーなどを学ぶとともに、体験学習を組み込むことで日本文化を総合的に理解することを目指す。また体験学習から発表までの一連の活動を通して、個々の文化理解を深める。到達目標は、①教室活動で学んだ知識とフィールドワーク体験を繋げることによって、日本文化への理解が深まる。②一連の授業活動を通して、日本文化への関心が高まり、また、調査・発表などの主体的な学びによって、日本文化を深く理解することができる、である。その後、両科目の実践内容を紹介した。

最後に、学習上、フィールドワーク実施上の課題を挙げ、「わかやま日本学副専攻プログラム」の意義ついても発表した。前者の課題では、日本語以外の科目が共修になったことから、一部の学生には授業理解において困難であること、また国によっては、フィールドワークという科目がないことから理解されにくいことを示した。後者の意義に関しては、共修の日本事情クラスを例に挙げ、グループワークの困難さは、学生にとっては、協働して課題（調査から発表）を解決するための、リアルな協働作業であり、一連の活動が学生の成長に繋がっていることを示した。

3. まとめ

本発表では、他大学の日本学の概要を概観しながら、現在日本学が求められていることを共有し、また「わかやま日本学プログラム」の概要、現状課題、そして意義を述べた。今後もまた、このような発信の機会を設けていくことで、「わかやま日本学プログラム」への理解、さらには「日本学」分野の発展に少しでも寄与していきたい。

参考文献

・大阪大学大学院人文学研究科/文学部現代日本学研究室
http://japanese-studies.jp/　(2023 年 8 月 1 日閲覧).
・大阪大学大学院文学研究科・文学部
https://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/academics/undergraduate-course/f-nihongaku
(2023 年 8 月 1 日閲覧).
・竹本幹夫(2021)「日本文学研究と日本学」、『学術の動向』26 巻 4 号, 57-61.
・東北大学　日本学国際共同大学院
https://gpjs.tohoku.ac.jp/about/summary/ (2023 年 8 月 10 日閲覧).
・筒井琢磨(2012)「日本学を巡る論点の試行的整理－国際日本文化研究センター設立時の議論を手がかりに―」、『日本学論叢』第 2 号, 209-216.
・西村政子・趙彩尹(2022)「日本の大学におけるグローバル人材育成の現状と課題」、『教育経済学研究』vol 1, 12-25.
・文部科学省「グローバル人材の育成について」資料②
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf (2023 年 8 月 1 日閲覧).
・伴野 文亮 ・茂木 謙之介 編(2022)『日本学の教科書』、文学通信.
・和歌山大学　わかやま日本学副専攻プログラム
https://www.wakayama-u.ac.jp/cjs/fukusenko.html (2023 年 8 月 10 日閲覧).

［協定大学　事例報告 1］

東国大学日本学研究所の歴史と現在

鄭聖希（東国大学 日本学研究所）

1. 発表の背景・目的

東国大学日本学研究所の歴史、そして 2017 年９月から実施している韓国研究財団における大学重点研究所支援事業について紹介する。

2. 発表の概要

東国大学日本学研究所は、1979 年に韓国における最初の日本学研究所として開設された。他大学にある日本研究所や日本学研究所の設立年代を考えると、その大部分が 2000 年以降に設立されているため、当研究所はいち早く日本研究所の設立の必要性に注目したといえる。
また、2017 年９月に韓国研究財団が実施する「大学重点研究所支援事業」に選定された。大学重点研究所支援事業では、「在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティー」というアジェンダで研究を６年半行ってきた。この研究事業では、在日ディアスポラ関連の資料を「政治・経済」、「社会・教育」、「芸術・スポーツ」分野において総体的に調査・発掘・収集し、分析することにより体系化した文化地形の構築を試みることを目標としている。この事業において、本発表では「社会への拡散」をキーワードとし、紹介した。

・講演会や研究書

2017 年９月から 2024 年１月まで、翻訳書 12 冊、コロキウム 22 回、招請講演 23 回、シンポジウム９回実施。翻訳書は、研究者の研究成果として出される研究書はもちろんのこと、小説など、日本で販売されたものを韓国語で翻訳し発行した。また、講演会は、在日ディアスポラ関連の研究者の方、各分野で活躍中の在日ディアスポラの方々などを招請した。シンポジウムは、各回、芸術・政治・文学などテーマを設定し、１部では招請講演を２部では研究発表を行った。

また、このプロジェクトの大きな成果といえるのが、この研究叢書の発行だといえるだろう。2023 年 12 月に『在日ディアスポラとグローカリズム』と題して、全６巻の研究叢書を発行した。各巻ごとに、「歴史」、「政治・経済」、「社会・文化」、「文学」、「教育」、「芸術・スポーツ」と在日ディアスポラに関連する論文を各巻ごとに約 15 編ずつ収録している。

・講義での活用

東国大学文科大学日本学科と芸術大学映画映像学科、ダルマカレッジとの協議を通じて教科目を開設した。教科の中で、研究所専任研究人材が在日ディアスポラ関連の講義を行い、学部および大学院生に対し、在日ディアスポラに関する理解を高める努力をしている。また、このような講義を通して、大学院への進学や研究者志願者の増加へ一部寄与しているといえる。

・次世代研究者育成

大学院生である研究補助員の海外資料収集能力強化支援プログラムを実施し、海外で資料を収集できるように支援を行っている。また、研究補助員のシンポジウムの発表なども積極的に行っているため、このような支援を通して、次世代研究者の育成に寄与している。

3. まとめ

本発表では、東国大学日本学研究所の簡単な歴史と、社会への拡散というキーワードのもと、講演会や研究書（翻訳書・研究叢書)、講義での活用、次世代研究者育成という３つの柱を中心に紹介した。

研究という分野は、なかなか難しく一般の方々に伝わりにくい部分がある。そのため、社会とのつながり、いわゆる一般の方々にどのように関心を持っていただくのか、まきこめるのかということは、日本学を韓国で紡いでいくための重要な要素であるといえるだろう。

参考文献

東国大学日本学研究所大学重点研究所支援事業パンフレット
東国大学日本学研究所ホームページ：https://js.dongguk.edu/main

［協定大学　事例報告 2］

ベトナムにおける日本語教育事情
- フェニカ大学の場合 -

レー・ティ・ゴック（フェニカ大学）

1. 発表の背景・目的

ベトナムにおける日本語教育は、1961 年にハノイ貿易大学にて開始した。その後、次々と他の大学でも日本語学科が設立された。最近では、工科系・理科系の大学における日本語教育開始が広がっている。そのうち、2019 年にフェニカ大学情報工学部内に日越情報工学科開設、日本語教育が始まった。3 年後の 2022 年に日本語学部も設置された。

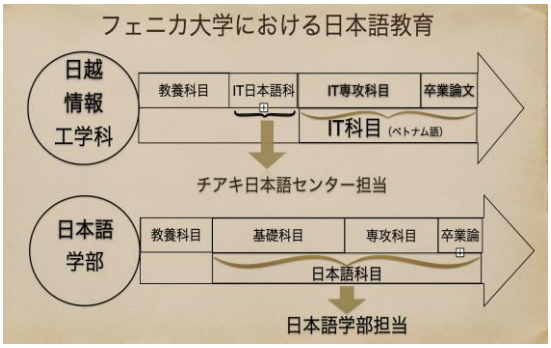
本稿では、筆者が通勤しているフェニカ大学を事例として挙げ、ベトナムにおける日本語教育の現状について報告する。問題点を述べながら、今後のベトナムにおける日本語教育の発展とその発展のために、可能だと思われる日本からの支援を提言することも述べる。

2. 発表の概要

フェニカ大学は 2018 年に創立された私立大学で、日本語学部はもちろん、IT 学部や　　経済学部、医学部など様々な専門が学べる総合大学となった。

フェニカ大学では、日本語は 2 つの学部、つまり日本語学部と情報工学部で実施されている。この 2 つのプログラムの違いは日越情報工学科においては主に IT 科目を学ぶが、日本語学部においては日本語科目が教育カリキュラムの大部分を占めることである。現在、日本語学部における日本語授業は日本語学部が担当しているが、日越情報工学科においては Chiaki という日本語センターに委託されている。

フェニカ大学



図：フェニカ大学における日本語教育

2.1 日越情報工学科における日本語教育の概要

日越情報工学科は情報工学部のコンピュータ科学科、データサイエンス・人工知能学科、ソフトウェア工学科、情報工学科、日越情報工学科の 5 つの主専攻の 1 つである。日本語科目は必修科目として、在籍する全学生を対象として実施される。学習者が基礎日本語はもちろん、日本語の IT 用語・ビジネスマナーや模擬プロジェエクト等の日本会社のことも受講する。図のように、日本語は第 1 年生からベトナム語で学習する IT 科目と並行して行う。その他にも大学のカ

リキュラムの中には「インターンシップ」という科目が含まれ、学生は日本へのインターンシップに参加したりベトナムにおける日系企業においても約 3 カ月～9 カ月、企業研修や研究指導を受けることができる。IT 高等教育人材育成プログラムで、ブリッジ SE の育成が目的とし日本への就職を目指したカリキュラム通りに実施されているため、日本語（N3 レベル）習得が必ず必要となる。つまり、日本語能力試験 N3 を取得しないと卒業できないということになった。

2.2 日本語学部における日本語教育の概要

日本語学部は設立されて 2 年目であるが、1 学年約 200 名の学生が入学している。1 年生から教養科目と並んで日本語教育の時間を取っている。3 年次から専攻分野に分かれ、通訳翻訳、教授教範、日本文化・観光、経済・ビジネス日本語という 4 つの専攻から 1 つを選択し体系的に学修することで専門性を高める。4 年間にわたり開講される全ての日本語科目の履修が義務付けられ、修了までに合計 138 単位取得が求められる。

2.3 問題点

本校では、日本語学習者が年々増加傾向にあるものの、日本語教員、特に日本人教員が不足するのが現状である。大学の専任教員は最低限、修士学位を有することが採用の条件になっているため、修士の学位を持っている教員を確保するのはかなり難しい。また、日本人の教師は学生の日本語コミュニケーション能力の向上には欠かせない存在であるが、採用するのが非常に難しい。その上、カリキュラムを見る限り、日系企業を想定した日本語関連科目は多く用意されているため、その指導には日本語教育だけでなく、実務経験のある教員が求められていくであろう。

3. まとめ

これまで新規フェニカ大学を中心にベトナムの日本語教育の事情を概観してきた。また、ベトナム人日本語教員の不足に対しては、本学部のように日本語教授法の専攻課程が設置されているといった様々な対策を講じてはいるものの、教師不足が抜本的に解消される状況にはない。特に、日本人教員という人的資源の不足による日本語教育上の問題点が明らかになったが、この解決には日本からの支援も考えられるのではないだろうか。最後に、ベトナムの日本語教育の発展のために、日本の教育機関と互いに協力しながら支援していくのが効果的であろう。

［参考文献］

・国際交流基金：2021 年度日本語教育機関調査結果
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2022/vietnam.html#KEKKA

・フェニカ大学の Fanpage： https://web.facebook.com/daihocphenikaa

・Sun*ホームページ： https://xseeds.sun-asterisk.com/university-20210415/

・Dao Thi Nga My(2018), ベトナムにおける日本語教育の事情-現状と今後の期待-世界の日本語教育・日本語教育学会 1-5.

・岡本輝彦, Quyen Nguyen Nhu （2022）, ベトナムの大学日本学科における日本語教育の現状と課題—ホンバン国際大学を中心に—」『中国学園紀要』Vol21,197-204

・ジェトロ（日本貿易振興機構）：ベトナムの IT 系大学と日本企業等との連携可能性に関する調査
https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2023/3ea450db1fe01b35/Vietnam_ITUniversity.pdf

［協定大学　事例発表 3］

インドネシアにおける日本語教育と日本学
ビナ・ヌサンタラ大学の事例報告

ウタリ　ノベラ（ビナ・ヌサンタラ大学）

1. 背景・目的

現在、インドネシアでは日本語が最も人気のある外国語の一つである。学校のカリキュラムに組み込まれているか、大学の専攻として日本語を勉強しているインドネシア人は少なくない。インドネシアでは日本語学習者が世界で２番目多い。なぜかというと、たくさんの日本の文化や技術がインドネシアに流入していることと、仕事や留学あるいは旅行の目的で日本に行きたいインドネシア人が増えているためだ。

インドネシアのビナ・ヌサンタラ大学（省略：ビヌス大学）はインドネシアベスト１０大学の１つである。ビヌス大学は６２専攻があり、日本語学科はその一つの専攻である。ビヌス大学の日本語学科においては、日本理解に対する授業科目の分野が３つに大きく分かれている。

2. 発表概要

日本語教育の分野は科目が一番多い。ほとんどの科目は日本語スキルの科目である。日本語スキルの授業においては人との授業だけではなく、テクノロジーも利用している。テクノロジーは最近発展していて、授業のデリバリーが変わったところがある。ビヌスの日本語学科の場合は、１年生のときにアプリで日本語スキルを勉強している。このアプリはビーリングアと言う。ビーリングアアプリの特徴は、独自開発されたアプリで、単元にあった問題でビデオチュートリアルがある。前は文法、読解、聴解、漢字を勉強するときは対面による授業を行ったが今はアプリを使っている。しかし、会話と作文は話す練習及び書く練習が必要なので、これまで対面により授業を行う。Nushi (2017)によると、アプリを使った語学学習はどこでも学べるので楽だが、アプリを使うのに適さない学習タイプもあるということだ。日本語スキルの勉強も同様にアプリで勉強することに合う科目があり、合わない科目もある。さらに、まだテクノロジーに関係があるが会話の授業で VR(Virtual Reality)を利用した。VR 上で現実を想定した場面を作成し、場面によって会話を練習する。会話の事例として、ホテルの受付、買い物などがある。

日本教育の授業には作文発表という科目がある。この科目はプロジェクト型学習導入というコンセプトを用いる。最後のゴールは「成果発表」というイベントで学生が発表する。学生が自由作文を日本語で書き、論文作成までのスキルを身につけることである。自由作文は、これまで習った文法、漢字、表現を全て使わなくてはならない。一人ずつ興味のあるものを自分、もしくはグループのプロジェクトとして立ち上げ、それをプレゼンテーションし、プロジェクトを説明する日本語を、プレゼンテーション形式で使用する日本語と、PPT で実際に使用できる日本語を同時に学ぶことができる課題である。学生は、書く力だけでなく、自分のプロジェクトの計画、創造力、判断力、時間管理、そしてハイレベルな日本語を習得することができる。

また、日本語教育の授業においては言語学入門という科目もある。言語学入門の科目では、テクノロジーと授業内容を組み合わせる方法、つまりコーパス (Ninjal コーパス) を使用して研究データを検索する方法も学ぶ。クラス以外の授業は学生が学んだ文型を日本語のネイティブスピーカーと直接練習する機会もある。これは ICT を用いてオンラインで海外大学との交流（COIL）である。COIL 学習システムはパンデミック中に広く導入され始めた。ただし、COIL は現在でも代替学習方法として使用され続けている（Sagala,2022）。COIL は長期（共同授業など学期ごと）または短期（定期的な文化交流）で実施される。長期にわたって実施される COIL の例としては、毎学期開催される和歌山大学との共同講義が挙げられる。短期的な COIL 活動としては、日本の複数の大学との文化交流活動などが挙げられる。

日本文化教育の分野は現代文化を紹介する。例えば、ポップカルチャーやアニメやコスプレなどである。また現代文化だけではなく、茶道、着物着用などのような伝統文化も実習する。一方、文学の授業では、日本の小説や短編小説を分析する方法を勉強する。したがって、この授業の成果は学生が優れた分析スキルを身につけ、これが後で論文を書くときや仕事の世界で役立つことである。

日本のビジネス文化の分野は、日本のビジネスの基本を学び、日本語でのメール対応も学ぶ。ビヌス大学の日本語学科は多くの日本企業パートナーがあり、インターンシップ生を毎年定期的に受け入れており、卒業生も受け入れている。また、日系企業パートナーによる就職説明会も毎年定期的に開催しており、インドネシアの日系企業、特にクリエイティブ産業企業への卒業生の受け入れ率は非常に高い。ビジネス文化の授業では、日本企業の現状を直接見て体験できる業界訪問プログラムを設けている。その後、インターンシップ段階に入る前に、学生は公開講義や業界からの共有セッション、同窓会の共有やビジネスマナーに関する研修などのさまざまなプログラムが提供され、仕事に必要な資格も取得できる。

3. まとめ

日本語教育の授業は、学生が日本語を理解し話せるようになるために最も重要なことである。特に日系企業で働く人にとって、日本企業は受け入れる日本語レベルの基準を定めている。また文化教育は、卒業後、特にインドネシアと日本の文化的違いを理解するのに非常に役立つ。学生は高い分析スキルを持っている。ビジネスに関係する授業は、学生が社会人の世界に入る準備をする。仕事の世界について豊富な知識があるため、学生はすぐに仕事に慣れることができる。インドネシアへの日本の投資の増加により、日本語、日本文化、およびさまざまなハードスキルの知識を持つインドネシア人に日本の産業に参入する機会が与えられた。日本語、日本文化の知識、さまざまなスキルを習得する必要がある。大学における専攻の選択、適切な科目、各授業からの明確な成果は、学生の仕事の種類の選択、仕事へのモチベーション、仕事への適応能力に影響を与えると考えられる。

参考文献

R. Sagala and T. Rezeki, “The Utilization of MOOCs using Kahoot and Student Engagement in Digital Learning During Covid-19 Pandemic,” Southeast Asia Lang. Teach. Learn. J., vol. 5, no. 1, pp. 1–7, 2022.

Nushi, M., & Eqbali, M. H. (n.d.). Duolingo: A Mobil Application to Assist Second Language Learning (App Review). In Teaching English with Technology (Vol. 17, Issue 1). http://www.tewtjournal.org, 2017.

https://blog.maukuliah.id/universitas-terbaik-di-indonesia/

https://www.ninjal.ac.jp/english/

［協定大学　事例報告 4］

「日本語を学ぶ」から「日本語で学ぶ」への転換

―異文化コミュニケーションを重視した教育実践を例として―

胡偉（東北財経大学）

1. 発表の背景・目的

中国では異文化コミュニケーション能力の育成は近年、重要視されるようになっており、外国語専攻の到達目標の一つとして、教育部による学部教育スタンダードに明記されている。同スタンダードは 2018 年 1 月に公布された『一般高等教育機関学部専攻類教学質量国家標準』（『国標』と略す）のことであるが、計 587 の専攻が全部扱われており、育成目標、開講科目、設置基準などが定められている。『国標』によると、外国語教育の目標は、幅広い教養と優れた外国語運用能力及び関連分野の専門知識を持ち、わが国の国際交流と経済的社会的発展や国際的な協力が求められる業種に応える人材、また外国語教育及び学術研究の需要に応える専門的な人材かつ複合型材を育てることである。『国標』のもとで『一般高等教育機関学部日本語専攻教学指南』という日本語専攻の教育ガイドラインが制定され、2020 年 4 月に公布された。『指南』では、『国標』に則って育成目標、開講科目、設置基準などが詳細に定められているほか、参考用のカリキュラムも提案されている。日本語専攻生の 7 期目に科目「異文化コミュニケーション」の開設と履修が義務化された。

東北財経大学（以下、「本学」）では、授業内で茶道や和菓子を学生に体験させるだけでなく、授業外でも長期交換留学、短期海外インターンシップ、協定校とのオンライン交流会、サマー・ウインタープログラムの同行など様々な形で異文化体験の機会を学生に提供できるよう工夫がされている。

2. 発表の概要

（1）日本を理解するためのコースデザイン：本学では、学生が日本への理解を深めるように、理論と実践を兼ねてシラバスの内容を選定し、授業形式の多様化を図っている。現在、中国における日本語教育の現場で広く使用されている異文化コミュニケーションの教科書は主に次の 5 つである（表 1）。

表 1　異文化コミュニケーション関連の教科書（出版年　古い順）

番号	タイトル	出版年	出版社
1	新視野異文化コミュニケーション日本語	2018	外研社
2	中日異文化コミュニケーション実用ガイドブック	2019	華東理工
3	異文化コミュニケーション日本言語文化ガイドブック	2021	外教社
4	異文化コミュニケーション理論と実践	2021	外教社
5	中日異文化コミュニケーションガイドブック	2022	外研社

上記の教科書を参考に本学の当該科目のシラバスが作成された。授業内容の例として、①カルチャーショック、②「タテ社会」の人間関係、③「ウチ」と「ソト」の人間関係、④「義理」と

「人情」、⑤日本人の遠慮と察しのコミュニケーション、⑥しぐさとジェスチャー、⑦身体接触行動などが挙げられる。授業形式に関しては、従来の知識伝授型では異文化コミュニケーション能力の育成に限界があるため、アクティブラーニングを導入している。ワールドカフェなどの形で教室活動を行い、ピア・ラーニングを通してみんなで知識を構成しようという教室環境を整えてきた。

（2）国際交流の推進：本学は 20 以上の日本の大学と協定を結び、長期交換留学を実施している。以前、定員数が限られて、学生が留学に行きたいが行けなかったという時期があった。しかし、国際交流の推進により、現在は学生の希望に沿えるような機会が提供されている。また、大学院生向けの短期海外インターンシップも好評継続中である。受け皿は長野県と和歌山県の温泉リゾートであるが、夏の観光シーズンに人手不足で求人の需要が高い。一方、異文化体験を通して大学院生活を充実させようという学生の声もよく耳にする。両方のニーズをマッチングさせるために、専門業者に取り持つように依頼し、実施してきた。さらに、協定校とのオンライン交流会を定期的に行う。相手国の社会や文化への理解を深めることを目指し、相手国の言語で自分の趣味、故郷、大学生活、将来の夢などについてスライドを使って紹介し、その後グループディスカッションするというイベントである。

（3）異文化理解促進のためのイベント：日本語スピーチコンテストは異文化理解を促進するための形式としてなじみ深い。全国範囲の「中華杯」が毎年行われるが、地域により 8 の予選ブロックに分かれている。一つの予選ブロックだけでも 20 以上の大学が参加しており、上位 2 位のみ全国決勝戦に進出できる。本学所在地である大連市では「キヤノン杯」が年に 1 回実施され、2024 年で 35 回を迎える。また、日本語弁論（ディベート）大会が近年注目を浴びており、「白雪姫は幸せなのか？」というようなテーマに対する議論から学生の言語能力だけでなく、批判的思考（クリティカルシンキング）能力も問われる。

3. まとめ

異文化コミュニケーション能力の育成には教育の内容かつ形式が多様化しつつある。今後、産学連携により企業側や社会の求める人材像を把握した上で、日本語教育を通して異文化を理解し、国際的な視野を持つ人材を育てることが望まれる。

参考文献

胡偉.中国の日本語教育における「日本語で学ぶ」の実現―「国際貿易（日本語）」コースの実践を通して.早稲田日本語教育学,2022,33:115-120.
胡伟. 研讨式教学法在日语精读课中的实践与研究—以句子、文章的解析为例. 日语学习与研究,2015,02:90-98.
唐向红,段雪娇,胡伟. 跨学科人才培养的课程体系优化—以东北财经大学为例. 东北财经大学学报,2015,05:52-56.
单凯，胡伟. 翻译实践课堂研讨式教学成效分析.日语教育与日本学，2019,14:55-65.

レスポンデントによるコメントと質問、全体討議

■進行役

長友 文子（和歌山大学日本学教育研究センター　センター長）

■事例報告の５名の先生方

安本　博司（和歌山大学日本学教育研究センター　副センター長）
鄭　聖希（韓国・東国大学）
レー　ティ　ゴック（ベトナム・フェニカ大学）
ウタリ　ノベラ（インドネシア・ビヌス大学）
胡　偉（中国・東北財経大学）

■コメント・質問・全体討議

1.　実際に日本語を教えておられる先生全員にお伺いしたいです。
広い意味での文化が違う人たちが一緒になると摩擦や解決しないといけない問題が起こってきますが、先生方が学生の指導をしておられて課題だと思っていることがあるか、それを乗り越える力をつけるためにどんなことが必要だと思っているか教えていただきたいです。また東国大学の鄭先生については、在日ディアスポラの人たちの問題をめぐって、一般の人を巻き込んでいくことが大事というメッセージに全く同感で、研究所でいろんなイベントをされたり出版物を出したりと伺ったが実際に今、どういう効果があるかとかを教えていただけたらと思います。

回答

［安本先生］

授業の中で意識していることは、日本人と留学生のグループワークをすると、いろんな困難、特に言語の壁がありますが、空中分解しないために共通の課題をもって、問題解決に向けて協働していけることが非常に大事だと思っています。

［胡先生］

留学生との摩擦よりも、学生自身が持っている特殊性で摩擦が常に起こっていると思います。学生の多様性を尊重し、学生自身にも相手の個性を尊重することも最初の一歩として共通認識にしてもらえるように伝えています。授業でピアラーニング、ワールドカフェなどで話し合う機会を設けて、自分自身の考えをしっかり伝えて理解してもらえるように努力しないと相手が理解してくれないと伝えています。それを共通認識になって学生が話し合うと、自分とは違う意見であっても、視点を変えて理解するような工夫、取り組みが見られました。

［ウタリ先生］

学生がインターンシップで企業に行く際や、留学生とのオンライン交流でのコミュニケーションなどで摩擦が起こります。インターンシップの際は、大学側と企業側に相談役がいて、摩擦があったときには定期的に相談したりしています。何か問題があれば、学生と会社側と相談役の方が参加してミーティングをやっています。オンライン授業の場合は、ジョイントレクチャーがあります。インドネシアの学生は、言いたいことがなかなか言えないとか、壁があってコミュニケーションが難しいです。授業の前やオフラインのときに、文化の違いもあるから、お互い理解できるように努力してくださいとアドバイスします。先生同士もよくミーティングをしていて問題解決を図ります。

［ゴック先生］

新設大学なので、海外に留学している学生はあまりいません。去年和歌山大学に 2 人、サマープログラムに参加した。2 人は最初英語も日本語もあまりできないので、怖くてあまり行きたくないと言っていましたが、帰ってから「行ってよかった」と言いました。これからも日本や海外へ留学するプログラムを作ってがんばりたいと思います。

［鄭先生］

当研究所は一般の団体、日本の研究所などと MOU を提携しておりまして、韓国では団体と一緒に在日ディアスポラと映画祭などを開催しています。そういうことを通して、研究所のことを一般の人々に知ってもらうことが大切だと思っています。またメーリングリストに登録していただいた人には、行事開催などをお知らせするという形をとっています。目に見える形での効果はまだまだ数字で表れている段階ではないですが、メーリングリストの登録者数もどんどん増えていると感じています。

2. 日本語、日本学、日本文化をネイティブの先生、ノンネイティブの先生がそれぞれの立場で教えるにあたって、何かお考えがあれば教えていただきたいです。

回答

［安本先生］

韓国で 2 年住んでいて日本語を教えていました。日本で教えるときは学生が体験できて、気づきがあって、いろんな視点で物事を見ることができますが、海外で教える場合、学生が教室を出て、いろんな日本人人と接してそういう体験や気づきが得られるかと言えば、そうではありません。学生は日本から来た私を、日本人の先生として私から知識を得て、学生はそれが（そのまますべて）本当のことだと思う危険性があるので、海外で日本を扱うときはそこを意識して慎重に話していました。

［胡先生］

学生が教師を見るときに、教師がネイティブかノンネイティブかではなく、教えてくださる先生だという目線で見ていると考えています。文法とか音声をメタ言語的に説明するときは、ノンネイティブ先生が有利になると考えています。

［ウタリ先生］

ネイティブの先生が会話の授業をしてくださると、学生は日本語をしゃべらないといけないので、学生の自信がつきます。ノンネイティブの先生が文法を教えますが、実際にどういう場合で使うかとなった場合は、ネイティブの先生の説明で学生はすぐ使い方がわかります。

［ゴック先生］

日本人教師の募集は難しいので、ボランティアとして大学で日本語を教えている日本人の先生が多いです。応募しても来ないので、それは問題だと思っています。

［鄭先生］

日本語の入門を教えているが、私は日本で育っているので、韓国の学生が日本語のどこでつまずくのかわかりません。最初の授業で学生にはわからないところは言ってほしいと伝えたり、親しい（日本語の）先生にハングルの構造と合わせてどんなふうに韓国の学生に教えたらいいのかを聞いたりしています。

3. 日本学などについての単位取得の要件がレポートや論文提出になっている場合、その時の言語は日本語で書くのでしょうか？それとも母語での作成としているのでしょうか？各大学の先生方にお伺いしたいです。

回答

［安本先生］

留学生も日本語を学びに来ているので、日本語でレポートを書いて、提出して評価して成績を出しています。

［胡先生］

日本語学科の学生だったら、レポートは日本語で書きます。

［ウタリ先生］

ビヌス大学の場合は、インドネシア語で書きます。

［ゴック先生］

2 年後、卒業生が（初めて）出る予定ですが、日本語で書かせると思います。

［鄭先生］

日本語の授業は日本語で、日本学の授業のレポートなどは韓国語で作成していると思います。

4. （海外の先生方の大学に）日本語母語話者の先生はいらっしゃいますか？もしいらっしゃる場合は、その先生のご担当している授業や、学部内での役割はなんでしょうか？

回答

［胡先生］

本学では日本人教師 2 人います。日本人教師は会話と作文だけではなくて、アカデミックジャパニーズ、日本概論などの授業を担当してもらっています。本人の希望があれば、科目に関わらず担当できます。特に 1 年、2 年生の精読授業など、本人の希望があれば（担当してもらうことも）考えられます。

［ウタリ先生］

1 人のネイティブの先生がいます。授業は日本語で、先生のおかげで学生の会話力が上がります。学生の会話に対する自身もつきます。ですが、文法の授業では、先生の説明が全部日本語だとわからないところもあります。

［ゴック先生］

ネイティブの先生はいません。ですが、ＩＴ学部のプログラムで日本企業からいらっしゃった日本人に、レポートの書き方とか、ＩＴ日本語を担当してもらっています。

［鄭先生］

私の知る限りですが、ネイティブの先生が１人います。その先生は韓国語もお上手なので、日本文化系の授業も担当されていますし、日本語の授業も担当されています。

日本語授業には別途講師の方々もいますので、講師の方々の相談を受けたり、まとめたりする役割もしていらっしゃいます。

5.　鄭先生にお聞きしたいです。先生は日本でマイノリティの立場として日本文化の課題をよくお気づきではないかと思うのですが、私は自ら情報を取り込んで、自ら判断していく風潮が一つの課題かと思っています。その結果、周りに同調してヘイトスピーチをするなどが日本国内で起こっています。同じような課題が韓国の学生に日本語や日本文化を学んでいる学生のなかにそういう共通の課題があれば教えてほしいです。

回答

［鄭先生］

日本の学生たちと交流会をして討論を聞くと、ポップカルチャーとかに関心があって、あまりそういう深いところまでは話は行かないけれども、韓国もネット社会なので、情報を受け入れて判断することは多々あると思います。私は日本で育ったので、韓国でどのような歴史教育がされているかは知らないので、日本の歴史の授業をしていると、私が考えつかなかった発言をする学生もいるので、韓国人の先生に韓国ではこの歴史の一部分をどういうふうに教育をしているのかを聞くこともあります。日本も韓国も課題は多いと思いますが、出会うことによって変わるのではないかと思うので、でそういった意味で交流が進んでいけばいいと思います。

6.　（オンラインでのコメント）京阪神の大学で朝鮮語教育・在日朝鮮人論を教えている者です。今日は各地の日本学・日本語教育の実践から多くを学びました。それに比べると、日本における朝鮮学はまだまだだと実感しました。K-POP 大韓民国に偏った学習動機をどう乗り越えて、朝鮮民主主義人民共和国をどう学んでいくのかを考えていきたいと思いました。日本だからできる南北等距離の朝鮮学を考えたいです。

7.　今日の締めくくりを一言ずつお願いします。

［鄭先生］

他の先生方のいろんな考え方や取り組みがあることを知りました。特に VR で会話をするというのはすばらしいと思ったので、大学に持ち帰ってこのような授業をしたいと伝えたいと思います。

［ゴック先生］

こういう場で発表するのは久しぶりで、思ったようにうまく発表できなかったが、みなさんの顔を見て安心しました。

［ウタリ先生］

新しいことをたくさん勉強しました。ビヌス大学に戻って学生とシェアしたいと思います。

［胡先生］

留学生に伝えたいのは、せっかく日本に留学したのだから、自分を外の人間ではなく、コミュニティの一員としてみなして自分なりに社会に貢献してください。

［安本先生］

今、日本には 305 万人と過去最高の外国人がいますが、その人達が日本語をツールとしてコミュニティに入って新しい文化を作り上げています。数十年後数百年後日本文化として自明視されるかもしれない。そこにはいろんな人たちの関わりとか参画があってできていることを見失わないようにしなければならないと思います。

イベント実施報告

日時：2022 年 2 月 15 日（木）13：00～16：50
場所：和歌山大学北 1 号館 A101 教室，Zoom
題名：和歌山大学国際イニシアティブ基幹日本学教育研究センター　主催
　　和歌山大学国際シンポジウム第 3 回「アジアにおける日本語教育―日本語教育と日本学―」
担当：長友センター長、安本副センター長、嶋本特任助教、貴志、ジェイコブソン
参加者：主催者側 5 名、基調講演者 1 名、事例報告者 5 名、視聴者（会場＋Zoom）117 名
　　（Zoom 事前登録者 135 名）
内容：

和歌山大学国際イニシアティブ基幹日本学教育研究センターが主催し、Wakayama University Symposium Series と題した国際シンポジウムの第 3 回目を開催した。「アジアにおける日本語教育―日本語教育と日本学―」をテーマに、国内外から日本学、日本語教育の研究者・教師が対面で基調講演、事例報告、そしてレスポンデントにコメントと質問、全体討議を行った。視聴者は対面、Zoom とハイブリッド形式で集い、各国の教育事情、日本学と日本語教育の関わりについて、課題を共有するとともに、相互理解を深めた。世界 13 か国から 135 名の視聴者が参加し、多くの質問が寄せられ、また活発な議論が行われた。

（報告者：嶋本　圭子）

本学 本山学長による開会挨拶	京都教育大学 浜田教授による基調講演	事例報告の様子１
事例報告の様子２	事例報告の様子３	質疑応答の様子
全体討議	本学 長友センター長による総括	本学 藤永副学長による閉会挨拶

和歌山大学国際シンポジウム　第３回準備委員会

大会準備委員　長友 文子　（和歌山大学 日本学教育研究センター，教授）
安本 博司　（和歌山大学 日本学教育研究センター，准教授）
藤山 一郎　（和歌山大学 日本学教育研究センター，准教授）
嶋本 圭子　（和歌山大学 日本学教育研究センター，特任助教）
貴志　真帆　（留学生支援係特任職員）
ジェイコブソン 久美子（留学生支援係教育研究支援員）

事務局　国立大学法人 和歌山大学 国際イニシアティブ基幹
日本学教育研究センター

ポスター、チラシデザイン： デザイン事務所 BIRDs
編集・校正： 嶋

CJS 主催

Wakayama University Symposium Series vol.3

和歌山大学国際シンポジウム 第３回

「アジアにおける日本語教育―日本語教育と日本学―」

報告論集

発行日　2023 年 3 月 20 日

発行者　国立大学法人 和歌山大学 国際イニシアティブ基幹
日本学教育研究センター
〒640-8510 和歌山市栄谷 930 番地
Tel ：073-457-7524
Mail：cjs@ml.wakayama-u.ac.jp

国立大学法人
和歌山大学
wakayama
univ.

Wakayama University
Center for Japanology Studies